特集　井伊直弼銅像首切り事件?！
その顛末と銅像建立をめぐる紛争

横浜生まれで横浜育ちの郷土史研究家田村泰治氏でさえも知らなかった掃部山（かもんやま）公園に建つ“井伊直弼（いいなおすけ）銅像の首切り事件”、田村氏はその真相を探るべく、入念に調査された。出版社への問い合わせ等も多々行ったにもかかわらず、間違ったことが事実として３０年以上も放置されてしまった･･･こうした経緯を今一度振り返ります。 また、明治になり、井伊直弼を顕彰しようという旧彦根藩士の動き、それを封じようとする藩閥の閣僚たち、江戸末期の旧藩の確執はその後何十年も続きながらも、ついに井伊掃部守（かもんのかみ）直弼銅像は横浜の掃部山公園に建てられたのであるが、そこには両陣営の深い執念と怨讐が感じられます。

（「史論集 II　郷土横浜を拓く」より。初出、神奈川県立図書館「郷土神奈川」４７号（平成２１〔2009〕年２月）
原文は縦書き・漢数字使用を、横書き・算用数字使用とし、難解な漢字はよみ等を追加、重要箇所は太字にした。また、適宜、取捨選択、追加なども行った。（編集：渡辺登志子）

田村泰治

目　次

はじめに
１．事件の発端　ーガイドブックに記述されていたことー
２．事実を調べる
（1）他社の出版物をみる
（2）当時の新聞記事を探る
（3）公的機関の刊行物
（4）古老に聞く

３．歴史が一人歩きする
（1）ある講演会で
（2）NHK ラジオ第２放送から
（3）吉川英治記念館「草思堂から」
４．意外な事実の発見
５．銅像建立に対する政争
（1）井伊直弼顕彰碑建立の動き
（2）除幕式の強行
（3）除幕式の当日
６．銅像の悲劇は続く・・・
（1）関東大震災の被害
（2）太平洋戦争による銅像撤去　～金属回収令の発布～
（3）開港百年、銅像の再建立
まとめにかえて―銅像毀釈捏造の原点は―
（１）吉川英治の随筆「折々の記」から
（２）歴史を志す者にとって大切なこと

掃部山公園に立つ井伊直弼銅像）

１．はじめに

歴史研究会の席上で会員の方から「**掃部山公園に建つ井伊直弼銅像の首が切り落とされた**と書いてある本がありますが･･･」、という素朴な発言があった。参加者皆が驚き、その話題が沸騰した。銅像は台座から１１メートル余もある青銅製で、銅像の首をどうやって切り落としたのか…？

著者もながいこと横浜の歴史に携わっていたがそんな話は一度も聞いたことがなかった。当該書物は、歴史専門書や高校の教科書や資料集等を発行している出版社から刊行されている歴史探訪のガイドブックで、信用度も高く、多くの人に利用されているものだった。

井伊直弼の銅像建立については多くの政治問題が発生し、長い闘争の末、横浜掃部山に決定を見て、開港５０年祭に併せて銅像の除幕式が行われた。しかし、**本当にその銅像の首が切り落とされた事件があったのか、横浜でこのような事象が歴史事実として存在していたのかどうか、その真偽を確かめる必要があると考え、銅像建立の経緯からその後のことなどを調べてみた。**

１．事件の発端　－ガイドブックに記述されていたこと－

この部分は原文において、出版物の取り違いなどの混乱がありましたので、主意に変わりなく、編集者により修正させていただきました。

横浜市中央図書館で入手できた歴史関係の書物で、井伊直弼銅像の首切断に関する記事が掲載されていたもののなかで一番古いのは、**山川出版社版の全国歴史散歩シリーズ 14「神奈川県の歴史散歩」**1978 年 12 月 25 日（1 版 4 刷）発行で、編著者は神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会である。4 種類（すべて同じ編著者）あったので、以下、各初版の発行順に並べてみる。

山川出版社発行の“銅像の首切り”が掲載されているガイドブック（左から）

① 全国歴史散歩シリーズ 14「神奈川県の歴史散歩」1978 年 12 月 25 日（1 版 4 刷）初版 1976 年 6 月 25 日
② 新全国歴史散歩シリーズ 14、「神奈川県の歴史散歩」上　2000 年 2 月 25 日 2 版 1 刷発行（初版 1987 年 5 月 25 日）
③ 「横浜散歩 24 コース」　1999 年 3 月 30 日（初版）発行
④ 歴史散歩 14、「神奈川県の歴史散歩」上　2005 年 5 月 15 日（初版）発行

① 1976 年 6 月 25 日 1 版 1 刷発行から、下記のようになっていたと思われる。

この銅像の除幕式は直弼こそ吉田松陰たちを死に追いやった安政の大獄の張本人だといって猛烈に反対した元老や大臣たちの圧力をおしきって、1909（明治 42）年 7 月 21 日、大隈重信やイギリス総領事を招いて行われた。しかし、翌日には、銅像の首がきりおとされたり、さらに第二次大戦中は金属回収さわぎでとりはらわれるなどの受難をうけた。・・・
（58 ページ、右画像が該当箇所）

②2000 年 2 月 25 日 2 版 1 刷発行（初版 1987 年 5 月 25 日）の新全国歴史散歩シリーズ 14「神奈川県の歴史散歩」上では、

・・・この銅像は幾多の受難を経て今日に至っている。まず除幕式に至るにも一波乱あった。というのは，当時の神奈川県知事周布（すふ）公平の父は萩（山口）藩士周布政之助である。井伊直弼は長州・萩の人々が尊敬する吉田松陰を安政の大獄で殺した人で，この人々の圧力もあって除幕式中止が命ぜられたのを旧彦根藩士らは除幕式を強行したのだった。しかし翌日には銅像の首が切り落され，また第 2 次世界大戦中の昭和 18 年，金属回収により取り払われるなど・・・　（96 ページ）

③1999 年 3 月 30 日（初版）発行の「横浜散歩 24 コース」、テーマ 1，8、井伊直弼像の項では

・・明治15（1882）年ころから旧彦根藩の士族らは直弼の銅像建立を計画した。市の有力者からの助力などを断り、旧藩士だけでつくり、横浜開港50年を記念して 1909 年に除

この銅像の除幕式は、直弼こそ吉田松陰たちを死においやった安政の大獄の張本人だといって猛烈に反対した元老や大臣たちの圧力をおしきって、一九〇九（明治四二）年七月二一日、大隈重信やイギリス総領事たちをまねいて行なわれた。しかし、翌日には、銅像の首がきりおとされたり、さらに第二次大戦中は金属回収さわぎでとりはらわれるなどの受難をうけた。その間一九一四（大正三）年には、この丘陵は横浜市に寄付され、桜の名所としてまた港が一望のもとにみわたせる風光雄大な公園として、市民にしたしまれるようになった。現在の銅像は、開港百年祭の記念行事のひとつとして、昭和二九年再建されたものだ。

幕式を行った。その後、銅像は首を切り落とされたり、･･･　(94 ページ)

と、書かれていた。この内容には他にも間違いがある。**当初は銅像ではなく顕彰碑であったし、開港５０年を記念して建てられたのではなく、藩閥側による様々な阻止で建立できなかった３０年余の時間経過を解決するために、幸い開港５０年式典があることに乗じて実行**されたものであった。

④2005 年 5 月 15 日（初版）発行の**歴史散歩 14「神奈川県の歴史散歩」上**では、

…ところが除幕式は、当時の神奈川県知事周布公平（長州藩士周布政之助の息子）によって中止が命じられ、旧彦根藩士らが除幕式を強行すると翌日には、銅像の首が切り落とされていた。…　(90 ページ)

1976 年から刊行されてから３０年余（本稿初出 2009 年の時点）にわたって書き続けられているということは、確かな事実や歴史史料を元にしての出典からの引用されたものと考えたい。が、**引用文献が明示されていない。これではどのように「首が切り落とされた」のか経緯が皆目分からなかった。**

２．事実を調べる

(1) 他社の出版物をみる

他の出版物にはどのように書かれているのか、元々がガイドブックだったので、同類の書物等を横浜市中央図書館で当ってみた。何冊か同様の記述があるのを見つけたが、それら**は山川出版社版より後に書かれており、出典の明記がなく、内容表現から推し量って孫引き的な引用記述であったと判断した。**

とりわけ、**「横浜謎とき散歩～異国情緒あふれる歴史の街を訪ねて～」谷内英伸著　廣済堂出版社 1998 年**刊は表紙にもタイトル**「首を落とされた井伊大老の遺恨」**が記載され、その 19 ページには、かなり詳しく書かれていた。

･･･当初は 1909 年に横浜開港五十周年を記念して、旧彦根藩の士族たちによって造られた。ところが、これには因縁話がいくつかある。当時の神奈川県知事は、萩（山口）藩出身の父をもつ周布公平で、おなじ頃に吉田松陰をはじめとする長州･萩の志士たちが井伊大老の断行した「安政大獄」によって命を散らしていた。それからまだ五十年ほど、歴史の記憶に生々しい萩の関係者にとってみれば、心おだやかには見過ごされなかった。銅像の除幕式は、これらの人々の不穏な圧力によって、中止を命じられるというはめになった。収まらないのは、旧彦根藩士たちである。無理やりに除幕式を強行する挙にでた。その翌日、井伊直弼の銅像の首は切り落とされたのである。…

廣済堂出版社のガイドブック。表紙にも、「首切り」が記述されている。（赤線の箇所）

と、ストーリー性が強くなっているが、これも孫引きと思われる。が、参考文献に山川出版社のガイドブックの名はなかった。

後日のことであるが、**この廣済堂に問い合わせ、首が切り落と**

された事実はないことを指摘した。「著者が居所不明、絶版の予定でいます」との返事だった。しかし、再版され書店の書架に並べられているのを見たときは本当にびっくりした。

(2) 当時の新聞記事を探る

明治４２(1909)年は横浜開港５０年祭でマスコミも大きく取り上げているので、関連した内容であることから**新聞紙上に掲載されないわけはない**と判断し、**「横浜貿易新報」「東京日日新聞横浜版」**を同年７月から１２月末まで横浜市中央図書館のマイクロフィルムで隅なく調べたが、除幕式後の**事件内容の記事は発見できなかった**。銅像建立や除幕式にかかわる記事はかなりのスペースを割いて写真入りで書かれているのに、翌日の銅像を壊すことに関する記事がないことは、**その事実がなかったことを意味するのではないか**。

だが、**偶然、後述する３０数年後に起こった首切り未遂事件を新聞から発見し、この問題の根深さが浮き彫りにされた**。

(3) 公的機関の刊行物から探る

では地方公共団体が関係して刊行している歴史書にはこの事件がどのように取り上げられているのだろうか。我々が一番信頼して引用したり、事実確認に採用している**「横浜市史」通史編・資料編、「神奈川県史」通史編・資料編、「滋賀県史」、「彦根市史」、「横浜西区史」**等々の書籍を当ってみたが、事件があったことを探すことはできなかった。

(4) 古老に聞く

掃部山公園近くの古書店主から、「父は小さい時から岩亀横町近くに住んでいて、**掃部山の銅像の首切りの話を聞いていたが実際にはなかった**」と、子どもの頃、聞いたことがあるという。また、西区文化協会の幹事会席上で、ある役員のご婦人から「**私も小さい頃、聞いたことがある。**でも誰から聞いたか記憶にない」とのことだった。古老の話をまとめた**『ものがたり西区の今昔』『横浜中区史』等にあたったがこの事件に関する記述はなかった**。しかし、街に風聞が流れていたとすれば何らかの事実があったと考えざるをえない。

3. 歴史が一人歩きする

(1) ある講演会で

神奈川県青少年センター主催「第１回新春お楽しみ KOUZA」が平成１９（2007）年１月７日に開催され満員の観衆を集めて、文学講演・歴史講話・創作落語の３部形式の演出で行われた。その２部、歴史講話は**「横浜開港余話」**と題し横須賀の著名な郷土史家が担当した。**話題のなかに、「銅像の首が切り落とされた」と話され**、さらに、第３部の『落語』の部では「井伊家の招き猫」が演じられ、**出演師匠はその枕ことばにこの首切り事件を使って演じられた**。

(2) NHK ラジオ第２放送から

NHK 東京放送のカルチャーアワー**「文学探訪」**の『横浜・鎌倉・湘南を歩く』講座で、2006～7 年に放送された「文明開化の道」項目で**講師の先生がテキストと放送で、「首切り」の件を取り上げていた**。

問い合わせたところ、直接、講師の先生から回答をいただいたが、**「何かの本で読んだ気がする。」とのことで出典は不明**であった。しかし、丁寧に対応してくださり、多くのご示唆とご意見をいただいた。

(3) 吉川英治記念館ブログ「草思堂から」

東京都青梅市にある吉川英治記念館の学芸員が日誌として研究の一端を紹介するインターネットのブログから偶然にこの事件に関するカギが見出された。平成１７(2005)年５月２０日「横浜散歩―その６」に**吉川英治の随筆のなかの「面白い思い出」**として、

‥すると除幕式が終えてから数日経ったら、人々がアレヨアレヨと騒いでいるんだな。なんだと思ったら、**掃部山の銅像の首がない**という。それで、その日の**横浜貿易新聞という僕らなじみのある新聞が「掃部頭の首が二度取られた」と書いていた。**

と述べ、資料館の学芸員も英治の事件記述はやや不正確なので、他の資料を参照しながら銅像事件をまとめたとしている。**ここでは『首切り』の事実があったことから出発していた。**問い合わせをしたところ、**学芸員からは吉川英治の実体験のようだからそのまま取り上げた**と説明された。

４．意外な事実の発見

掃部頭銅像の首を狙ふ天照義團
深夜の街を壯漢の一隊
斬奸狀をふところに殺氣疾風
横浜貿易新報 1953
(昭和10) 年3月4日

除幕式の翌日、銅像の首が切り落とされたといわれた時から**約３０年後の昭和１０(1935)年３月４日、「横浜貿易新報」の記事**に

掃部頭銅像の首を狙う天照義団
　深夜の街を壯漢の一隊
　　斬奸状をふところに殺気疾風

という見出しで３月２日午前１時１０分頃、伊勢佐木警察署の巡査３名が日之出町近くの長者橋でトラック２台を取り押さえ、８名の者を逮捕したことを報じていた。**トラックの荷台には梯子、ロープなどを積み、「井伊直弼の銅像につぐ」という斬奸状があり**、本署での取調べが始まった。

天照義團に判決
1953年(昭和28年)10月8日

この一団は横浜市中区長者町、山下幸弘方に事務所を置く天照義団（団長、山下幸弘）の団員で企画部長、宮崎県生まれ、３７歳の田上実次ら団員７名であった。**その日が桜田事変の日**にあたり、掃部山に建設されている**井伊掃部守の銅像の首を取り、銅像撤去をはかって日頃の目的を達しようと意図した**ものであった。彼らの主張は**「井伊大老が違勅の不忠義者であり、安政大獄の張本人だ」**として、横浜市に銅像の撤去を要求していたが当局が自分らの言い分に耳の貸さない態度に憤慨して暴挙に出たと主張した。

当時、全国で右翼団体の騒擾（そうじょう）行動が続発、要人の暗殺等の不穏な動きが顕著になったため、政府は取締り強化方針を打ち出

し、全国の警察署が警戒に入った矢先の逮捕であった。伊勢佐木署は恐喝罪を適用し起訴。１０月７日横浜区裁判所では判決を言い渡している。(「横浜貿易新報」昭和１０(1935)年１０月８日付)

これらの記事内容が明治の事件と混同して吉川英治が記述しているように思える。また、古老の話もこの事件にかかわったものではないか。記憶違い、年代の誤差やズレは聞き取り取材には良くあるのかもしれないが･･･。

５．銅像建立をめぐる政争

(1) 井伊直弼顕彰碑建立の動き

井伊直弼記念碑建設の動きは近江彦根から始まった。明治１４(1881)年６月２０日、旧彦根藩士の武笠資節、宇津木翼等の有志が彦根の楽々園で大会を開き、この件を協議したが、**時期早尚の意見が多く、当分見合わせ**となった。それには藩主井伊直弼の開港通商の功績と内政に関する評価とでは後者の方が明治藩閥体制では強く、不利であることが挙げられていた。

今、専修大学の史資料課所蔵文書**「井伊直弼像建設の沿革」や「新修彦根市史」八巻**等を参考にしてその動きを年代順に追って見よう。

明治１４ 1881 年	9 月	建碑移文、建碑規約の決定 発起人：彦根　武節貫治・宇津木 翼・武笠資節・大久保章男 東京　日下部東作・横川源蔵
	11 月	在東京建碑委員を選定
明治１５ 1882 年	４月	在彦根地方建碑委員を選定 **記念碑建設の候補地として東京の上野公園、芝公園、靖国神社付近**を公私内外に交渉した。
	7 月	建碑位置を**横浜戸部不動山(現在の掃部山)に決定しようとして総会を開催したが東京に建設すべきとする意見が多数を占めてこの案が否決**された。
	10 月	**上野東照宮境内に建設申請**をした。
	11 月	上野東照宮境内に銅像式銅標を建てる件が明治１５年１０月１４日に東照宮より内申されるが、**内務省は第二局議案で否決**し、その理由が述べられている。 元来公園ナルモノハ最モ其風致ノ存セルカ為ニ衆庶爰ニ来ツテ偕楽スル処ナルヤ勿論、･･･恰モ一ノ墓地ニ彷彿タルモノニ相成候テハ大イニ園内ノ風致ヲ破り、不都合ノ事ト存候間、･･ 且東照宮　官ニ於テモ固ヨリ同意ヲ表スルニ非スシテ、不得已副願セシモノナルヤニ相見ヘ候　明治15年11月16日
明治１６ 1883 年	1 月	内務省は第二局否決を受けて**申請された上野東照宮境内での建設**を１月１８日付で**不許可**とした。
	9 月	**上野東照宮、芝東照宮付近に建設しようとして交渉したがすべて不調**に終った。
	11 月	建碑・位置の選定を委員に一任することにした。審議の末、**横浜戸部不動山鉄道局所有地に決定**して、その払い下げを同局長に出願した。
明治１７ 1884 年	1 月	その許可を得て、**地所を開墾し、平地に均し、記念物設計に着手**した。横浜に於いて多数の世話人を委嘱し、事業の進捗をみた。 この**鉄道山の土地購入**に関しては、当時、横浜正金銀行取締役であった**相馬永胤（旧彦**

		根藩士）が、銀行の社宅を作るということで土地取得している。本文下方にある田村氏の**「相馬永胤と井伊直弼銅像」**で説明されている。 （補足説明）掃部山公園入口に立つ案内板には：「 旧彦根藩士〈滋賀県〉らが一帯を買い取り庭園化し、井伊家に寄贈したことから、井伊掃部頭直弼にちなみ**掃部山**となりました。　西区制７０周年記念『温故知新』魅力アップ事業実行委員会　平成 26 年 11 月」とある。
明治２６ 1893 年	8 月	**神奈川県知事 中野健明が内務省**警保局長小野田元に井伊直弼遺勲碑建設の**是非につき問い合わせた**。それに対し**内務大臣井上馨が拒否の通告**を発し、**再び建碑は一時中止を見る**こととなった。　内務省の「公文別録」によると 警乙第四七号 **故井伊直弼遺勲碑建設許否ノ件** …神奈川県知事ヨリ当局主務局長ヘ照会シ来レリ、依テ之レカ碑文ヲ調査スルニ頗ル直弼ノ功績ヲ賞賛敬慕スルノ言辞トス。然ルニ直弼ノ執政上是非得失ニ付テハ、今尚ホ識者ノ非難ヲ免カレサルノミナラス、同人ヲ殺害シタル者ハ現ニ靖国神社ニ鎮祭セラレアル儀ニ付、一応陸軍省ヘ内儀及候処、同省ニ於テハ異議無之趣、且一個人ノ意思ヲ表白スルモノニ過キサレハ、素ヨリ鎖末ノ事項ナルニ付許可スヘキノ見込ニハ有之候得共、**目下ノ状勢少シク顧慮スル所ナキニアラス**、…為念閣議ヲ請フ 明治26年11月17日　内務大臣伯爵　井上馨　印 この文書と共に、同年８月９日付で、神奈川県知事中野健明が警保局長小野田元に宛てた「故井伊直弼(旧彦根藩主)遺勲碑建設ノ儀出願候者有之、碑文ノ概要ハ・・・」という書き出しで「本邦今日ノ外交アルハ、畢竟直弼ノ功労与リテカアリト認ムルコト…当時国事ニ殉死セシ霊魂ニ対シ感情ヲ害スルノ嫌有之・・治安上穏カナラス…」として、**県知事自身の反対的立場**が読み取れる。さらに、建碑の場所が根岸村にある競馬場脇の民有地としているのも、この時期には戸部不動山と決めているし、申請も同様と考えられる。**銅像建立の反対が先行しているからであろう。これから１５年間、計画は中止され、建設計画は頓挫してしまった。**
明治３２ 1899 年	3 月	**東京府が日比谷公園を開設することになり、彦根藩下屋敷に近い場所**であることから**顕彰碑建設の適地と判断し、交渉した所、内諾がえられた**。記念碑建設の活動が一気に活発化したが、５月１９日に突然、**内務省から横槍**が入り、また計画は頓挫。これは「形像取締規則」（省令１８号、明治３３年５月１９日）急遽発令して、**願いを却下。その時の内務大臣は西郷従道**であった。
明治４０ 1907 年	2 月	発起者間に於いて、明治３６年、**近年流行の銅像建立を望む声**が広がり、建碑委員会はその変更を認めた。そして**来る４２年は横浜開港５０年、盛大に祭典を実施することを知り、このチャンスを生かし初志を貫徹する見解をまとめ、遺勲碑から銅像に変更して戸部山に建設する事に決定**し、趣意書を起草、設計に着手した。 １．容姿　衣冠束帯の正装 ２．建設者　委員総代　相馬永胤 ３．建設年月　明治４２年６月２６日 ４．除幕式　同年（開港５０年祭にあたる）７月１日 ５．原型作者　工学士　藤田文蔵 ６．鋳造者　岡崎雪声　鋳造高　１丈２尺 ７．台石設計者　工学博士　妻木頼黄　台石高　２丈２尺 「横浜復興誌」第３編　昭和７年刊　横浜市

掃部山公園入口現在

顕彰に関する案がつくられたのが明治１４(1881)年。当初から東京を考えていたが、反対が強いことから、最終的に横浜で取得していた土地（当時は「鉄道山」と言われた一帯で、購入は明治１７(1884)年）に決まり、銅像が建てられたのが明治４２(1909)年なので、なんと**着手してから２８年**も経っていた。

(2) 除幕式の強行

明治４２（1909）年６月**横浜の掃部山に銅像が建てられた**。７月１日横浜開港５０年記念祝賀式が挙行される。その際、除幕式を行事に取り組み、同時に実施しようと祭典委員会は計画し、案内状やプログラムにも掲載し、招待者に配布する手はずであった。が、**神奈川県知事 周布公平（すふ こうへい）は藩閥政府要人たちの反対表明を受け、除幕式の中止を横浜市に申し入れた。**強行すれば祝賀式典を政府要人がボイコットするとの強行意見があり、外国高官が参列し、政府の代表が欠けることは国際慣例上不都合になり、式そのものが成立しなくなる。この混乱を避けるため、**旧彦根藩士らは当日の除幕式を延期**して祝賀式典の開催を優先した。そして遅れること**１０日後の７月１１日に反対を押切って除幕式を挙行した。**

明治 42（1909）年 7 月 11 日開催の井伊直弼大老銅像除幕式「開港 50 年記念帳」より

(3) 除幕式の当日

当日の様子は新聞等に大きく書かれているが、横浜時事新報社から１２月に発行された「開港五十年記念帳」から様子を見てみよう。

••此時連日の霖雨漸く晴れて一天拭ふが如く式に列するもの東京横浜は勿論地方より来会せしもの頗る多数に及び定刻午後二時三十分に至り振鈴と共に嘹喨たる海軍々楽隊の奏楽起り銅像建設委員総代**相馬永胤壇上に顕はれ事業の経過を報告**し、尋いて**直弼卿の嫡孫伯爵井伊直忠像前に進みて幕を引けば**、美麗なる花崗石の台上に立ちし堂々たる束帯の像はきつ然として頭上に聳え英姿調爽恰かも生けるが如し、会衆皆蕭然敬意を表し暫時片言双話を発するものなかりしが、やがて拍手喝采の声は期せずして奏楽と共に起る、次いで**来賓伯爵大隈重信は追悼的祝辞大演説を試みたり**、次いで英国総領事ホール、又英語を以て祝辞を述べ法学博士増島六一郎其大意を通訳し茲に式を閉じ会衆皆余興を観覧する間に食堂を開き立食の饗応を為せり、宴酣なる時、大隈伯の発声にて会衆一同井伊家の万歳三唱し、子爵井伊直安遺族を代表し会衆及び建設委員に対し謝辞を述べ薄暮散会せり。（明治四二年一二月二五日発行）

大隈重信

と、当日の状況を述べているが**政府要人は欠席し、他の要人も気兼ねして出席していない。ただ、立憲改進党党首大隈重信のみが来賓として政府の一連の行為を非難し、600 名を超える参会者や聴衆から**

除幕式に合わせ　井伊家から寄贈された水飲み施設

大きな拍手で歓迎された。イギリス公使も祝辞のなかで大老の開港決断の功績をたたえた。

この土地は銅像の完成後、井伊家に寄贈された。その年、井伊家から横浜市に寄付の申し入れがあったが市会が「種々の事があって･･･」と中央政府との関係を考慮して、やんわりと断った。

それから５年後の大正３(1914)年、銅像管理を条件として横浜市に寄贈され、公園として整備し、市民に開放された。加えて付帯設備として開港図書館が建設される場合にはその一部として２万円の寄付が申し入れされていたがそれは建設されなかった。

６．銅像の悲劇は続く・・・

(1) 関東大震災の被害

銅像と掃部山と名づけられた公園は大正３(1914)年１１月７日、市民公園として整備されて開園した。八重桜の名所で、海を見渡せる市民憩いの場として賑わった。しかし、大正１２(1923)年９月１日正午直前、突然大地震が襲い、市内の家屋は倒壊し、火災によって多くの人命と家屋・財産を失い瓦礫の街と化してしまった。

掃部山公園は付近の罹災者の避難場所となり、仮設住宅が建設された。幸い、**銅像は倒壊せず、台石中央から約９０度右にずれて、台石の端が欠けた程度ですんだ**。震災復興事業として公園を整備し、銅像を中心とした部分では正面にもう一段、石の階段を作った。

(2) 太平洋戦争による銅像撤去　～金属回収令の発布～

わが国が昭和１６(1941)年、戦争に突入し、長期化するに及んで米英に四海を包囲されると忽ち資源が枯渇し、生活物資から戦争機材の資源に至るまで不足し、「欲がりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」のスローガンをたて、配給制の生活が強いられ、軍需品の生産が優先されて金属資源が欠乏する昭和１８(1943)年、**全国に金属回収令が発令**され、金属は門扉、金具、寺院の梵鐘、国民の身に付けている貴金属類まで供出させられた。(下方に補足説明として**「戦時中の金属回収『資源特別回収綴』から」**と題し、当時の金属（銅像）回収の基準が示されている。)

当時の新聞記事でその経過を見てみよう。

掃部さん応召　　けふお名残りの離魂式

ハマの名所掃部山からミナト横浜を一望に見降している開港に由縁ある井伊掃部頭の銅像が近く赤襷で応召する。16日午前10時から井伊家立会のもとに半井市長、田島･渋江両助役らが出席。**銅像前で名残りの離魂式が行われる･･**大正3年8月横浜市へ寄付されたもので、その条件として「永久に保存すること、若し保存が出来なくなった場合は井伊家へ返還する。」という一札が入れてあったので、市では井伊家と再三折衝を重ねた末、同家の承認を得て銅像回収に呼応することになったものである。　「神奈川新聞」昭和１８年６月１６日号

また、「朝日新聞」同年１２月２６日付によると

井伊掃部頭　市役所入り
石膏像近く市民にお目見得

出陣応召した横浜中区掃部頭の銅像を縮小した石膏像が24日午後市役所へ搬入された。像の高さ2尺5寸、台座が7寸5分だが銅像の型とそっくりもの。作者は鶴見区末吉町、清水青巌氏が半年の苦心の後完成を見た入念の作である。今、25日から市民博物館に陳列される。

と、紹介されており、現中央図書館脇にあった市民博物館に展示保管された。

(3) 開港百年、銅像の再建立

左：横濱絵葉書に見る金属回収前の昔の井伊直弼像。右：現在の井伊直弼像（2022.11.02 撮影）。台座との対比で見ると、昔のほうがずっしりとした感じで、現在のものより一回り大きく見えるがどうだろう。

昭和１８(1943)年以降、**掃部山公園には台座のみが空しく残されていたが、1954(昭和２９)年が横浜開港１００周年に当ることから記念行事の一環として銅像を再興する動き**があり、神奈川県・横浜市・商工会、それに市民の協賛を得て計画が実行に移された。

前年の１２月、実行委員会は慶寺丹長父子に銅像再鋳を依頼、基礎となる模型を東京の井伊家菩提寺、豪徳寺の井伊大老の彫刻を、先の銅像の原型大に拡大して出来うるかぎり前彫刻と合致するものになるよう苦心した。**昭和２９(1954)年５月２０日完成し、掃部山公園に据え付けた。１１年振りの銅像再現であった。**台座裏側には、この時の経緯が記されている。（その碑文は下方に掲載している。）

正面から撮影。頭部は確かに少し右に向いて、横浜港方向を見ている。

新しい銅像は旧台石の上に正装の姿で建ち、**正面を向き凝視している。いわば横浜港を見ているというより江戸(東京)方面を向く姿勢である。だがよく見ると井伊掃部頭の頭部のみは約１０度ほど右へ傾け、開港場よこはまを見るような姿勢になっている**ことが当時の写真からも、新しい銅像からも判読される。

著者も井伊直弼銅像を東京に建立させたいとする思いが当時は強かったことを受け、横浜に建立しても東京(江戸)を見つめる姿勢をとっていたと合点していたが、銅像は胴体は正面、頭は多少右向きにしていると了

解している。
　しかしながら、いつも横浜港を見つめていた直弼像は現在は林立する高いビルに阻まれ、港湾も海も、もはやそこからは見ることができなくなってしまった。

まとめにかえて ―銅像毀釈捏造の原点は―

(1) 吉川英治の随筆「折々の記」から

横浜にゆかりのある文豪、吉川英治の書いた長編時代小説「井伊大老」のあとがきの文中に、掃部山井伊直弼銅像の除幕式にかかわる体験記風に書き綴った内容があった。昭和２３年版で、その後「折々の記」に詳しく語られている。

•••銅像建造運動も興り、明治38年、かれの衣冠束帯すがたが、開港横浜の**紅葉山**にそびえた。•••
来賓の大隈重信が演説し、全横浜港は、**花火や花車の開港祭りに賑わった**。

と、述べているが、正確性はなく、この短いの文章の中に**３点の誤り（赤字）**があった。
さらにこの小説の**解説者清原康正氏**は文中で吉川英治の随筆「折々の記」の一文を引用して

銅像を建てる運動が邪魔されたり、**銅像の首がとられた**

と、平成１２年版で説明している。
　銅像毀釈の源はこの『折々の記』で吉川英治が記述していることが素因と考えられる。『折々の記』は記者と対談形式で話した内容を新聞の連載として発表し、後日まとめて１冊にして刊行したものである。

今回問題になるのはその随筆の中の**「僕の歴史小説観」**という項目の中で「歴史上の人物あれこれ」で語られたものである。

　井伊掃部頭が主義の邪魔者だというので、斬って時局を動かしたけれど、それから20年後には反対に井伊掃部頭の銅像が横浜に建ってしまい今度は開国の偉人ということになるでしょう。…僕にはその井伊大老について**面白い思い出がありますよ**。

と、述べていて、銅像の除幕式の情景から、その間の経緯、闘争が書かれ、首が切られた様子が事実のように語られている。

すると除幕式が終えてから数日経ったら、人々がアレヨアレヨと騒いでいるんだな。なんだと思ったら掃部頭の銅像の首がないという。それで、その日の**横浜貿易新聞**という僕らなじみのある新聞が**「掃部頭の首が2度とられた」と書いていた。ほんとに、銅像の首が失くなってしまったんですよ**。…銅像の首は地上へ降ろしたら大変な目方の物だったそうだが、いったい、どういう風にしてとったのかわからないんだ。それから**京浜国道をトラックに銅像の首を乗せて運ぶところを、捕まったという別の記**

事を、それは何年も後ですが見たことを覚えている。新聞にはやはり水戸方のした事だと伝えていたようです。
（赤字は著者が誤認の箇所とした所である）

この見聞は吉川英治が１３、１４歳頃と述べているが考察すると、かなりの誤記があり、この文章自体が歴史事実ではなく、時代小説的なフィクションもののように思える。列記してみると

１．　横浜貿易新報にはその記事は記載されていない。
２．　１３歳頃というが、英治は明治２５年生まれ、当時は１７歳になっていたはずだ。
３．　銅像は台座が７メートル、像が４メートルほど、この高さの首をどうやって切り落とすのか。約４トン近い重量の青銅、首だけでも相当重いし、落とせば首に傷がつく。ハシゴくらいでは実行不可能。
４．　京浜国道は明治４２年時代には存在しないし、トラックという貨物自動車は存在していなかった。当時はタクシー、自家用車が普及しはじめていた時で、東京には６０台の自家用車が存在していたという。万一自動車があったとしても公園内には横付できる広い道路はなかった。
５．　「犯人が捕えられた」のは旧水戸藩の仲間ではなく右翼団体「天照義団」で、２９年後の昭和１０年のことである。２台のトラックもその時である。

吉川英治はこの頃、横浜市西区西戸部の長屋に住み、年令を偽って**横浜ドックの通称カンカン虫、船舶の錆落としの危険な作業に従事していた**。掃部山際の岩亀横丁を毎日通っていたから、仲間たちからよもやま話を聞いていたかもしれないし、芝居小屋、寄席等が軒を連ねていたから講談や噺家、時代劇くずれの現代劇等で知識を得ていたのかもしれない。後日、**仕事場で足場を踏み外し海に転落、１ヶ月の重症を負って十全病院に入院している**。見舞い客からも市井の話題を聞いていたのかもしれない。もしも実際に事件が起きていれば器物破損、窃盗罪が適用されるから事件簿等に記載されるであろうし、昭和１０年の事件のように報道されたであろうが、それもない。銅像写真を図書館で調べられる範囲で見たが首のない写真や頭部だけ違う形式とか、色彩（白黒写真）というより時代空間による表面陰影の違いを見つけることは出来なかった。

(2) 歴史を志す者にとって大切なこと

横浜の、いや日本の、誇るべき文豪であり著名人である作家の体験記で語られれば、事実として、一般市民には受け入れられてしまうであろう。時代小説ならば作者の人生観や意図的構成をもって展開し、人物をイキイキと活動させ、主人公を浮き出させるために架空の事件や人物を配置するなど、フィクションでは当たり前のことで、歴史であって歴史でないことが事前の了解となっている。

しかし、歴史は真実を、事実を、極めることが第一で、史実に忠実でなければならない。**問題提起となったガイドブックは３０年近く、この銅像の首切り問題を世間に開示して事実として主張した。編集者に問い合わせても返事も質問事項にも答えていただけなかった。**出版社編集部の責任者は事実確認をしてくださり、近代史専門の顧問教授に調査していただき**事実無根という結論に達しているのにもかかわらず、**平成１９（2008）年の**新版発行の際は従来通りで発行している。理由は吉川英治が公表しているので、これを根拠に会社として継続いたしました**という。**廣済堂出版社は著者が居所不明、**

絶版の予定でいますということで了解していたら、**同様に再版されて書店の書架に並べてあった**のには驚かされた。著者とコンタクトを取りたいと申し入れたのは何のためだったのだろう。

多くの読者が間違った事実が正しい事実として記憶されることは歴史関係者にとっては一番危惧するところである。その禍を避けるためにはガイドブックであれ、パンフレットであれ、事実確認を行い、出典にあたり、自分の手でしっかり事実を確かめて引用すべきであろう。そして引用文献を明記すべきであろう。責任をもって新しい情報、史実に沿った内容を提供しなければならないと考える。

横浜市は平成２０(2009)年、開港１５０周年を迎えた（本稿初出の 2009 年時点)。この時期、今一度、横浜の歴史、郷土の歴史を、再点検、再評価をしてみてはどうだろうか。

（以下は、横浜歴史さろんのサイトにおいては、右コラム（右側の縦欄）に配置・掲載された補足説明である。）

特集　井伊直弼銅像首切り事件?！その顛末と銅像建立をめぐる紛争

―補　足―

吉川英治とは

吉川英治

吉川英治は、明治 25（1892）年 8 月 11 日、神奈川県久良岐郡中村根岸(現在の横浜市)に生まれ、昭和 37(1962)年 9 月 7 日、70 歳でこの世を去るまで、数多くの小説を残した国民文学作家です。

印章店の住み込み店員を皮切りに、様々な職に就いたのち、作家活動を行うようになりました。東京毎夕新聞社の社命により、初めての新聞小説『親鸞記』を無署名で連載しました。その後、『鳴門秘帖』『宮本武蔵』などで人気作家となりました。

吉川英治の小説は、大衆小説とも言われ、多くの人々を魅了し、現在まで永く読み続けられています。

他の代表的な作品として、『三国志』、『新・平家物語』、『私本太平記』などがあり、昭和 28(1953)年には菊池寛賞、昭和 35(1960)年には文化勲章を受章しました。　【青梅市郷土博物館のホームページ「青梅市吉川英治記念館」内より】

18 歳の時、年齢を偽って横浜ドック（横浜船渠株式会社）のかんかん虫（船具工）になったが、ドックで作業中船底に墜落、重傷を負う。その頃の体験を生かして書いたのが**「かんかん虫は唄う」という横浜を舞台にした小説**である。ネット上の青空文庫で読むことができる。

（史論集Ⅱ「郷土横浜を拓く」2015 年。第六章　横浜人物伝　七、「井伊直弼銅像建立と相馬永胤」より抜粋）

井伊直弼銅像建立と相馬永胤

井伊直弼の時代

相馬永胤

銅像の本人、井伊直弼は嘉永３(1850)年彦根藩主に４５歳で就任、あたかも外国船の来航の兆しが明らかになってきた時代、彦根藩が親藩として大名のなかでは重鎮で幕府老中職を継承し、「溜間詰」すなわち将軍御座所に隣接する場「間」に詰める地位のある大名であった。先代井伊直亮は６年間も大老職を勤めていたほどの高い地位にあった。

井伊直弼は、開国論・攘夷論が渦巻く幕末に大老職を拝命して内外の係争を解決する立場にたたされた。また将軍 継承問題・鎖国解消等で幕藩体制が揺るぎ始め、将軍指揮権が疎かになる事態に対処し、大老強権を発揮して絶対権の確立に立ち向かった。これが「安政の大獄」で、御三家の水戸藩への処罰、将軍継承を反対する勢力への弾圧となった。さらに、開国和親を認め、開国交易に踏み込んだ判断も攘夷派を倒幕攘夷へと向かわせてしまった。それに天皇の勅許を待たずして通商条約調印した行為が「朝廷無視」＝朝敵「国賊」の烙印を押させる原因となった。徳川幕府始まって以来の重臣暗殺事件、**『桜田門外の変』**はこの線上の事件であった。

「開港場よこはま」は開国によって作られた街で、井伊直弼の条約調印の決断がなければ成立しない。繁栄している居留地横浜は井伊直弼を「開港の恩人」とし、顕彰しているが、建立された銅像は横浜市が建立したのではなく、窮余の策で彦根藩士らが掃部山の前身、鉄道山と呼ばれる台地を購入し、建てられたのであって最初からこの地に建てる方針があったのではない。（この間の詳しい経緯は本文中の表を参照のこと）

横浜に銅像建立を可能にした立役者

旧彦根藩は東京での建設が阻止され不可能となったため、開港場の横浜戸部不動山(通称、鉄道山)の鉄道省所有の土地払い下げ申請を鉄道局長に出願することになった。この土地買収を提案したのは**旧彦根藩士で、横浜正金銀行取締役、相馬永胤（そうまながたね）**で、同じく藩士で、同銀行抵当課長であった松居十三郎がその任にあたり、入手した不動山一画に社宅(戸部町３５)を建て、居住し、この山陵を整地し、樹木を植えて庭園化していった。当時横浜にも３０名余の建設委員（主に旧彦根藩）や、1000 人ほどの賛同支持者がいたといわれている。

一方で、当初からの目的である井伊直弼の顕彰碑建立には、横浜でも問題があった。一つは彦根在住の藩士らがあくまでも江戸(東京)建碑に固執し、明治３２　(1899)年、東京府の日比谷公園造成の際、建碑建立の了承が府の幹部との間にあったためで、桜田門に近く、下屋敷に続く土地のため、この方向性が主流になった。また、この頃になって洋行帰りの政府高官が西洋の銅像建立の様子を周囲で吹聴したため、**銅像建立の気運が高まり、井伊直弼の顕彰碑も銅像に変更する**ことになった。しかし、翌年５月、内務省令第１８号『形像取締規則』の発布が行われ、内務省の許可を得なければ建像できなくしてしまった。また、横浜でも神奈川県知事中野健明が顕彰碑建立に関する問い合わせを 内務省にしたところ、**内務大臣井上馨から拒否通告**を受け、工事は中断してしまった。さらに県知事に周布公平が着任するに及んで一層混乱を招くことになった。

開港五十周年式典　旧藩士たちの執念と怨讐

明治１７(1884)年、横浜戸部、不動山　(鉄道山)に銅像建立を決定しながら多くの妨害を受けつつも私有地の庭に銅像を建立することには法令に違反しないとの判断にいたった。 明治後期は所謂「大正デモクラシー」が叫ばれる開明的思想が世界的に流布し始めた時で人々が権利意識や自我思想に目覚め、権力に対抗する風潮が生まれていた。国内では立憲政友会と立憲改進党が、横浜では商人派と地主派が政治的に相争う構造が形成さ

れてきていた。

横浜は明治４２(1909)年、開港５０周年祭を大々的に行うことを決定し市・商人会等が一丸となって祭典を行う準備をすすめていた。横浜の建碑委員会はこの機会を利用し、式典委員会は祭典を盛り上げるために、横浜開港の恩人、井伊直弼銅像除幕式を式典の中に加えることにした。式典プログラムも出来て、各界要人に招待状が配布された。当然式典には外国要人もその国を代表しての参加となったが、**政府は許可しない銅像除幕式が式典の中に組入れられていることに異議申立てを行い、式典のボイコットを伝えてきた**。県知事周布公平が強く反対していたが、県では横浜の意向を無視できず、さらに県は**横浜商人組合の経済的支援が必要**なため反対強行にでられず、押し切られてしまった。政府の強行姿勢は５０年祭そのものが中止に至ることにも成りかねない。来賓の外国公使・特使にたいする国際的儀礼に反するためで、横浜市も対応に苦慮する立場にたたされてしまった。

旧彦根藩士ら建碑委員会は急遽、予定を変更して、式典での除幕式を削除して５０年祭の遂行を優先した。そして、式典の１０日後、７月１１日に600名余の参会者を得て掃部山、旧彦根藩主庭園で除幕式が挙行された。来賓のイギリス公使ホール、**立憲改進党大隈重信は井伊直弼の開国・交易の先見の明を祝す演説をしたが、政府代表・県市関係者は誰一人出席しなかった**。建設者委員総代として相馬永胤が経過報告を述べている。

相馬永胤という人物

井伊直弼銅像建立に強い推進力を持って横浜地域の支持者を集めていたのが相馬永胤であった。旧彦根藩士で、アメリカに留学し、コロンビア大学、エール大学で法律・経済学を専攻して、明治１２(1879)年、帰国後、法務官に就任、１５年に退職して横浜正金銀行の経営危機救済業務に専念した。

彼は嘉永３(1850)年、彦根城下の尾末町で相馬右平次高胤の長男として誕生。代々藩士として尽くし、祖父、隼人は１３０石取の武士であった。祖父・父は槍術・馬術の名手で、父は鉄砲奉行を勤めた。永胤生誕直後、彦根藩の相州沿岸警備で、三崎御備場詰として転勤。一家を上げて相州へ移った。嘉永７(1854)年に職を解かれ江戸詰となり、永胤は少年期を江戸で過ごした。万延元(1860)年、桜田門外の変が起き、**大老井伊直弼が暗殺され、主君の首級を奪い返すために祖父、隼人が大活躍し、近江三上藩、若年寄遠藤但馬守胤統下屋敷から首級取り返した**。「彦根市史」中巻に『加田九郎太の首なりと称して取り戻し、藩医の岡島玄達に胴に縫合して、 江戸菩提寺豪徳寺に葬った』 『桜田門外で大老の流した血染めの土を四斗樽四杯に詰めて彦根天寧寺に送った』と、書かれている。永胤はまだ、１０歳という年で、世上の様子を知る由もなかったが、１９歳の慶応３(1867)年、東征軍が倒幕のために江戸に向って進撃し、藤沢宿に到着。その**西郷隆盛を永胤は訪問し、「江戸打ち入りに関する献策」を進言、官軍側について参戦する**ことになった。これは**「安政の大獄」等で彦根藩が『国賊』というレッテルを貼られ、その汚名を返上するために取った彦根藩士等の窮余の一策**であった。明治維新後、江戸で重野安繹(しげのやすつぐ)の塾生となり、 安井息軒に師事、頭角を現し、薩摩藩出身者を凌ぐほどになり、明治３(1871)年、２３歳で彦根藩より**アメリカ留学生に指名された**。明治６(1874)年帰国したが、彦根藩主の弟、直達１７歳)・石黒務の長男、太郎(１５歳)の外遊同行者として再び渡米。その留学中の明治９(1876)年、「日本法律会社」を設立した。帰国した明治１２(1879)年に東京南紺屋町（銀座一丁目）に会社を移した。

横浜では福沢諭吉の助言を受け、中村道太ら発起人２３名が為替決済業務の出来る信用銀行を開設する動きが本格化した。金融関係調達・融資できる機関の設立が横浜商人会等から要望されていたことの実現で、中心人物は早矢仕有的、中村道太、小泉信吉等で、資本金３００万円、頭取に中村道太、副頭取を小泉信吉、本店支配人、小野光景ら８名で構成し、政府から大蔵卿、大隈重信がこの銀行に加わった。外国貿易は変動が激しく、相場の流動性のため貿易商人は金融調達に苦心し、銀行の不良債権が増大し、経営不振に陥った。そこで為替割引融資、抵当融資など専門的な銀行経営ノウハウを相馬永胤にまかせるため、**明治１５年、官選取締役**

として任命、永胤は改称横浜正金銀行に就任した。以後、頭取を始め要職につき、明治３９(1906)年、後に首相になる高橋是清に職を譲り、**専修大学創設にあたり、初代学長となった**。また、横浜商業会議所常務委員も兼任し、横浜経済界の重鎮となった。

旧彦根藩士であった過去は井伊直弼２３回忌の明治１５(1882)年、大老顕彰碑建立の機運に覚醒され、横浜で活動していた永胤は「日記」に

『大老の横浜開港という勇断決行は他に多くの比類なき功労と言わざるを得ない』
『開国進取の端緒を開きたる功績は永遠に記念して国民等しくその英風を欣すべきもの』
と、書かれており、新思想をもつ福沢諭吉との知己、政治家の大隈重信、横浜言論界の重鎮、島田三郎との交流から井伊直弼銅像建立のための支援が政府から**反対されればされるほど、横浜商人等を中心にした民権派同志が結束して大きく成長していった**と考えられる。

最後に井伊直弼、相馬永胤の世相の評価を掲げておく。

井伊直弼

1. 幕末期の対外的な国難から日本を「剛毅果断」な判断によって救った「開国の元勲』である。国際港都よこはまを開き、西洋文化の窓口となって近代日本の礎を創った人物
2. 開国に際して「独断専行」による「違勅調印」を行った『国賊』とされた。倒幕維新政府樹立を阻害し、弾圧を行った天皇無視の逆賊である
3. 国際状況の中で東アジアの置かれた立場からの行動を比較検討の必要性がある。

藩政・求道家として

1. 藩政治の善政から為政者としての追求、代々京都守護職を受け継いだ家柄である。
2. 禅修行・茶道・能楽・国学等の教養の深度からの追求する必要性。

相馬永胤

1. 金融界・経済通としての評価は高い、政治的に華々しく活動した形跡はない。
2. 政府・政党から常に一線を画していた人物で、学究的であり、実務的であった。
3. 広い視野に立ち、熱烈な郷土愛の持ち主で、最後まで彦根藩の家臣としての行動をとっている。
4. 社会に有能な人材を送り出すため「専修大学」を創設し、学長となる。

〈参考文献〉
- 佐々木克著「幕末政治史」
- 「故井伊直弼朝臣銅像除幕式之記」彦根図書館蔵
- 「横浜成功名誉鑑」
- 前田重二 著「銅像に見る日本の歴史」 星雲社

他
（本文と重複する参考資料は省いた）

戦時中の金属回収「資源特別回収綴」から

文化財の供出に関してはどこでも混乱があったようで、山形県寒河江市の中学校に残されていた**「資源特別回収綴」**なる中に、 「銅像等ノ非常回収実施要綱」付箋で**「絶対秘―新聞ニ発表セズ」** として内容が書かれて

いる。

回収ヲ免レル銅像
〇　皇室関係、神像仏像ナド信仰ノ対象ナルモノ
〇　国宝・重要美術品（銅像には存在しない）
さらに、
〇　特ニ国民崇拝ノ中心デアル銅像
が加えられ、メモによると、代表的なものとして西郷隆盛、楠木正成を上げてある。
『銅像に見る日本の歴史』　前田重二著　星雲社

それらの条件で**供出を免れた銅像は全国で６１基**といわれている。（「日本史小百科」彫刻　久野 健絹）
井伊直弼の銅像はいずれにも該当せず、供出の対象となった。

井伊直弼の銅像台座裏側の碑

安政五年大老井伊掃部頭直弼は　内外の紛擾を排して日米修好通商条約の調印を決行し　ひろく通商の基を開き　近代日本発展の端緒をつくった　明治十四年旧彦根藩有志は　直弼追慕のため建碑の挙を興し　大老の事蹟に縁故深き横浜に地をトし　戸部町に一岡を購い　掃部山と称してここに造園を施し　明治四十二年園内一角に銅像を建立し　越えて大正三年園北とともにこれを横浜市に寄付した　不幸大戦中の金属回収により銅像は昭和十八年撤去の運命に遭い　公園また昔日の像（ヵ）なきところ　たまたま昭和二十九年開国百年祭を催すに有り　記念行事の一環として　開国に由緒深き井伊掃部頭の銅像再建と掃部山公園の整備を企画し　ひろく市民の協賛を求め　ここに復旧の業を興した

昭和二十九年六月二日
神奈川県
横浜市
横浜商工会議所
横浜市長平沼亮三書

【参考文献】
- 「新修彦根市史」通史編・史料編
- 「故井伊直弼朝臣銅像除幕式之記」　彦根図書館蔵
- 「相馬永胤伝」　専修大学
- 「横浜市史稿」政治編
- 「横浜開港５０年史」　横浜市
- 「井伊直弼」母利美和著　吉川弘文館
- 「井伊直弼」吉田常吉著　吉川弘文館
  等　多数

以上